

<論 説>

続『コリオレイナス』論
——“his Amazonian chin”をめぐる

恩 田 公 夫

(1)

『コリオレイナス』のテキストに“Amazonian”という言葉が一回だけ現れる。それはコリオライにおける戦闘でコリオレイナスが示した超人的な武勇に対する褒賞として、現執政官コミニアスが彼を次期執政官に推挙しようとして元老院議員らを前に行う演説のなかでのことである。コミニアスは、ローマで最高の美德とされている武勇の点でコリオレイナスに匹敵するものはいないと称揚した後、その英雄が初陣のときにすでに示した目覚ましい勲功について語る。

彼は齡十六のとき、

タークィンがローマに対して挙兵したおり、
他に抜きんできた戦いぶりを示しました。そこにおいで、
私が敬愛する当時の総指揮官は、彼の戦いぶりを目撃されました。
彼はアマゾン族のような顎で、唇の周りに剛毛の髭を生やした
敵どもを追い立てました。

At sixteen years,

When Tarquin made a head for Rome, he fought
Beyond the mark of others; our then dictator,
Whom with all praise I point at, saw him fight,
When with his Amazonian chin he drove
The bristled lips before him.

(II.ii. 87-92)¹⁾

この“Amazonian”に対して、論者が参照した注釈書のなかではオックスフォード版が、もっとも詳しく“beardless (the Amazons being a tribe of female warriors in classical myth)”と語釈を与え、さらに“beardless”について、“The Romans did not consider a boy without facial hair (*impubes*) an adult”と説明している。ラテン語 *impubes* は“not having attained

to manhood”と“beardless”の両方の語義を持ち、古代ローマ人が髭を男性の肉体的成熟の現れと見なしていたことを端的に示している。²⁾つまり、“with his Amazonian chin”は「アマゾン族のように顎に髭が生えていない、未熟な肉体で」ということになる。この Amazonian → female → beardless → physically immature という連想の流れは比較的スムーズであり、この箇所に関して意味解釈の上で困難を感じることはほとんどない。また、たとえ一瞬解釈にとまどったとしても、次行の“The bristled lips”によって遡及的に、Amazonian = beardless と容易に了解されるであろう。こうした解釈の容易さゆえであろうか、この“Amazonian”が批評家の注意を引くことはこれまでほとんどなかった。³⁾しかし、“Amazonian”のもとになっている“the Amazons”（アマゾン族）とは、極端な母権制社会を形成し、アテナイの英雄テセウスによるその征服は母権制に対する父権制の勝利を示すものと読まれる、そのような神話・伝説中の存在である。⁴⁾古代ローマはアテナイ同様に厳格な父権制をもって知られていた。とりわけ『コリオレイナス』の舞台となっている共和制初期のローマは、武勇を第一の美徳とする男性中心的な価値観に支えられた強固な父権制社会であり、コリオレイナスはそのなかにあってその支配的な価値観をもっとも純粋な形で体現している武人である。その人物を称賛する演説のなかで“Amazonian”という言葉が、しかも彼の属性を示す言葉として現れる。と、このように見てくると、この言葉は“beardless”と語釈を与えられてそれでお役御免というにはあまりにも大きな問題を孕んでいることが了解されよう。以下の論考は、この Amazonian = beardless というそれ自体は妥当な読みの陰で見失われてきたもの——“Amazon(ian)”が本来持っている神話的イメージ——を回復し、“his Amazonian chin”の隠された意味を探ることを目指している。

(2)

さて、手元にある『ギリシア・ローマ神話事典』⁵⁾は「アマゾンたち」(Amazons)について次のように説明している。

女武者より成る伝説的な民族。ギリシア人はアマゾンという名は「乳がない」の意で、弓を引きやすいように娘たちの右の乳を切ってあとを焼いたことを意味すると考えた。…アレスの子孫と考えられ、アレスを軍神として拝み、アルテミスを純潔と女性の力の女神として拝んだ。時おり近隣の部族の男と交わって子供を産んだが、男の子は殺すか、または奴隷とした。

以上のようなごく標準的な「アマゾン族」のイメージに照らして考えてみると、『コリオレイナス』において“Amazonian”という形容詞がもっともふさわしい人物はコリオレイナスではなく、その母ヴォラムニアであろう。⁶⁾彼女には上の「アマゾン族」の説明が、象徴的なレベ

ルにおいてではあるが、よく当てはまる。アマゾン族が弓を引く便利のために右の乳房を切っていたという伝説、これは彼女たちが子を産み育てるといった伝統的に女性に結び付けられる活動よりも、弓を引くという一般的に男性に結び付けられる戦闘活動を優位に置く価値観を持っていたことを象徴的に物語っていよう。そして次のヴォラムニアの台詞に典型的に示されているように、彼女はまさにそのような、母性愛よりも武勇を重視する価値観を持った女として描かれている。

ヘクターに乳を飲ませていた

ヘキュバの乳房だって、傷を負わせたギリシア人の剣に向かって、
なんのこれしきと侮蔑の血を吐きかけたヘクターの額ほど
美しくはなかった。

The breasts of Hecuba

When she did suckle Hector, look'd not lovelier
Than Hector's forehead when it spit forth blood
At Grecian sword contemning.

(I.iii. 40-43)

もちろんヴォラムニアは母親としてコリオレイナスを産み育てはした。しかし彼女の乳は、『マクベス』の“th' milk of humankindness”（人情の乳）(I.v. 17)という言葉に象徴的に表されているような、母子間の愛情をもとに周囲の人間へと拡がっていく人間的な優しい感情を植え付けるものではなく、わが子に「武勇」を吹き込むものであった。

お前の勇ましさは私のものだった、お前は私の胸からそれを吸い取ったのだ。

Thy valiantness was mine, thou suck'st it from me.

(III.ii. 129)

アマゾン族は「アレスの子孫と考えられ、アレスを軍神として拝み、アルテミスを純潔と女性の力の女神として拝んだ。」言うまでもなく、ギリシア神話の軍神アレスはローマ神話では軍神マルスと同一視される。ヴォラムニアの息子コリオレイナスのフル・ネームは Caius Martius Coriolanus であるが、劇中の彼は私的な場面でも公的な場面でも Martius という氏族名 (*nomen*) で呼ばれることが圧倒的に多い。⁷⁾ その名のラテン語の意味は「マルスの」(pertaining to Mars) である。⁸⁾ 彼が追放後、ローマの忘恩に対する復讐心から敵のヴォルサイ人の町に身を寄せたとき、不倶戴天の敵オフィーディアスは彼を “thou Mars” (IV.v. 119) と呼んで迎え入れる。その歓迎ぶりを目撃したヴォルサイ人召使は「この中で彼は軍神マルスの跡取り息子のようにもてもてだ」(he is so made on here within as if he were son and heir to Mars) (196

-7)と語る。また、『コリオレイナス』のテキスト中で“Mars”はさらにもう二度現れるが、それらはいずれもコリオレイナスが軍神に対して呼びかけたものである(Liv. 10, V.vi. 100)。⁹⁾ヴォラムニアの息子コリオレイナスは、テキスト中で軍神マルスと密接に結び付けられていると言ってよいであろう。

アマゾン族が崇めた純潔の女神アルテミスはローマ神話のディアナと同一視される。劇中でこのディアナと結び付けられるのはヴォラムニアの友人ヴァレーリアである。母ヴォラムニアらとともに、ローマに対する復讐を思い止まるように説得に訪れたヴァレーリアを見たコリオレイナスは、普段の彼に似合わぬ叙情的な言葉で挨拶する。

アプリコラの気高き妹御、

ローマの名月、純潔な雪を霜の力で凍らせて

ディアナの神殿に懸けた氷柱のように

清らかなご婦人——親愛なるヴァレーリア!

The noble sister of Publicola,

The moon of Rome, chaste as the icicle

That's curdied by the frost from purest snow

And hangs on Dian's temple! Dear Valeria!

(V.iii. 64-67)

シェイクスピアがこの作品の素材源としたノース訳『ブルターク英雄伝』ではヴァレーリアは、「ローマのすべての人々から名譽と尊敬を受け、慎しみ深く賢明に振る舞い、自分の家柄を辱めることがなかった」(Valeria was greatly honoured and reverenced amonge all the Romaines: and did so modestlie and wiselie behave her selfe, that she did not shame nor dishonour the house she came of)¹⁰⁾と述べられているが、彼女の純潔さについては特に言及されていない。ヴァレーリアを純潔の女神ディアナに結び付けたのはシェイクスピアの独創である。ヴォラムニアは軍神マルスと結び付けられるコリオレイナスを息子に持ち、ディアナと結び付けられるヴァレーリアを友に持っている、ということになる。

アマゾン族は、「時おり近隣の部族の男と交わって子供を産んだ。」これを結婚と夫婦間の愛情の軽視を示していると読めば、それはまさに劇中におけるヴォラムニアの最初の台詞に見られるものである。出陣中のコリオレイナスの身を案じてふさぎこむ嫁ヴァージリアを、励ますというよりむしろ叱るような口調でヴォラムニアは言う。

もしあの子が私の夫だったら、彼が名譽を得るために出陣していった留守のときのほうが私は嬉しいはずですよ、彼のベッドで抱かれてもっとも大きな愛を示されるときよりも。

If my son were my husband I should freelier rejoice in that absence wherein he won

honour, than in the embracements of his bed, where he would show most love.

(I.iii. 2-5)

ヴォラムニアは、夫の愛情よりも戦場での名誉を重んじる、と言っているわけで、それだけでも夫婦間の愛情の軽視をはっきりと示しているが、さらに、“If my son were my husband”という仮定表現は、亡夫に対する彼女の愛情の欠如を暗示している。通常の文脈であれば、ヴォラムニアが「私の夫」と言えば、それはコリオレイナスが幼少時に亡くなった彼女の夫を意味するはずであるが、ここではそのような意味作用を奪われているからである。ヴォラムニアの夫が彼女の意識のなかでどのような位置を占めているかは、これ以後も彼女の台詞のなかに亡夫への言及が皆無であることから窺われるであろう。

アマゾン族は、「男の子は殺すか、または奴隷とした。」ヴォラムニアは息子の命よりも名誉を重んじており、名誉のためなら息子の死も止むを得ないと考えている。一幕三場で彼女は嫁ヴァージリアに少年時代のコリオレイナスについて、まだ「ひ弱な体の」(tender bodied) (6)の息子を「残酷な戦争に送り出した」(To a cruel war I sent him) (14)と言っているが、その動機については、こう語っている。

私は名誉こそそのような美しい容姿にふさわしいと考えて——名声が命を吹き込まなければそんなもの壁に掛かった絵も同然でしょう——そう考えて、喜んであれを危地に赴かせたものです、栄誉が得られそうなところへは。

I, considering how honour would become such a person——that it was no better than picture-like to hang by th' wall, if renown made it not stir——was pleased to let him seek danger where he was like to find fame.

(9-19)

たったこれだけの引用のなかに“honour”, “renown”, “fame”という同義語が散りばめられ、彼女の「名誉」への妄執を暗示している。そしてヴァージリアに、「でももしそれで戦死なっていたら、お母さま、そのときはどうされましたか」(But had he died in the business, madam, how then?) (19)と尋ねられた彼女は、さらに息子の命の軽視と名誉への妄執ぶりを露にする。

そのときはあの子の名声が私の息子となったはず、名声をわが子と思ったことでしょう。本心から言うからお聞き、もしも私に十二人の息子があって、その一人一人が同じようにかわいく、お前の夫である私の息子マーシャスに劣らず大切に思われたとしても、その一人が戦にも出ず酒色に溺れているくらいなら、私はあとの十一人が国のために立派に死んでくれたほうがいい。

Then his good report should have been my son, I therein would have found issue. Hear

me profess sincerely : had I a dozen sons, each in my love alike, and none less dear than thine and my good Martius, I had rather had eleven die nobly for their country, than one voluptuously surfeit out of action.

(20-25)

一人の息子の不名誉な生より、むしろ十一人の息子の名誉の死を望む。そして実際彼女は、コリオレイナスがヴォルサイ人を率いてローマに迫り、祖国の破壊者としての汚名にまみれそうになったとき、彼を思い止まらせることに成功するが、それは結果的には彼に死をもたらすことになる。かつて、メニーニウスはコリオレイナスを民衆への反逆者として処刑することを主張する護民官に対して、ローマに功績のあった者を処刑するのは、「自然の情に悖る畜生の雌親」(an unnatural dam) (III.i. 290)がわが子を食らうようなもの、と言って反論した。ヴォラムニアの行動がまさにそのような“unnatural”なものであることは、次のコリオレイナスの台詞にも現れている。

(無言のまま母の手を取り) ああ母上、母上！
 なんとこのことをなされたのです。ご覧なさい、天が口を開き、
 神々が下界を見下ろし、この自然に反する光景を
 嗤っておられる。ああ、母上、母上、ああ、
 あなたはローマには幸福な勝利を勝ち取られたが、
 だが、あなたの息子を、本当ですよ、ああ、信じて下さい、
 この上ない危険に追い込んでしまった、
 致命的とは言わないまでも。

(Holds her by the hand silent.) O mother, mother !
 What have you done? Behold, the heavens do ope,
 The gods look down, and this unnatural scene
 They laugh at. O my mother, mother ! O !
 You have won a happy victory to Rome ;
 But for your son, believe it, O, believe it,
 Most dangerously you have with him prevail'd,
 If not most mortal to him.

(V.iii. 182-89)

ここでの“unnatural”は第一義的には、母親が息子に跪いて懇願している姿に言及したものであろうが、母親が自ら生を授けたわが子に死をもたらすことにも言及していると思われる。¹¹⁾ また、ヴォラムニアが息子を自分の願望充足のためのいわば「奴隷」としていることは、テ

キストのそこここに窺われる。例えば、一幕三場、ヴォラムニアはコリオライに出陣した息子の奮戦ぶりを思い描きながら、嫁のヴァージリアにこう語る。

そして、血みどろの額を
鎖帷子をつけた手で拭いながら、あの子は突き進んで行く、
まるで全部を刈り取らないと給金を払ってもらえぬ
雇われ農夫のように。

His bloody brow
With his mail'd hand then wiping, forth he goes
Like to a harvest man that's task'd to mow
Or all, or lose his hire.

(34-37)

敵兵の隊列の中を切り進んでいくコリオレイナスの姿を刈り取り作業に従事する農夫に譬える比喻に関して、Vivian Thomasは「生命を増進する農夫の活動と生命を奪う戦士の行動との対照のゆえに奇妙である」(It is strange because of the contrast between the life-enhancing activity of the farmer and the life-destroying actions of the warrior)¹²⁾と違和感を表明し、Brian Vickersはこの成長・栽培と死の混同はヴォラムニアの「性向の歪み」(perversion of nature)を暗示している、¹³⁾と言っている。しかし、オックスフォード版の注釈が指摘しているように、敵をなぎ倒す戦士の剣を刈り取りをする農夫の鎌に譬えるのはありふれた表現である。論者はむしろコリオレイナスの譬えられている農夫が「雇われ農夫」であり、しかも「全部を刈り取らないと給金を払ってもらえぬ」という悲惨な状況に置かれていることに注目したい。この比喻が暗に意味しているのは、コリオレイナスもまた母に隷属し、母の期待通りの働きを示さなかったならば彼女の賛辞という報酬を失うかもしれぬ、という恐怖に駆られて死に物狂いの奮闘をしている、ということであろう。ヴォラムニアはこの言葉をまったく屈託なく、むしろ息子にそのような働きをさせている自分の影響力・支配力の大きさを誇示するように、喜々として嫁に語って聞かせている。彼女は比喩的な意味においてはあながち息子を「奴隷」としているのである。

以上、ヴォラムニアのアマゾン的な特徴を彼女の台詞を中心に見てきた。アマゾン族は男性が作り上げた「女らしさ」や「母性」の観念——それは究極的には「産むこと」に集約される——を逸脱・拒絶し、武勇を中心とした「男らしさ」——それは突き詰めれば「殺すこと」に集約される——の領域を侵犯し、男の優位性に対して脅威を突きつける存在である。そのような特徴を色濃く帯びたヴォラムニアが、厳格な父権制に基づく男性優位社会で排斥されるどころかむしろ常に尊敬を集めている。これはどうしたことであろうか。次にその点を検討したい。

(3)

結論から言うなら、ヴォラムニアがアマゾン的な特徴を持ちながらローマの父権制社会にうまく納まっているのは、一つには彼女が男性的な領分と思われている戦闘に直接参加して男の存在意義を決定的に脅かす、というところまでやっていないからであろう。シェイクスピアの作品中で「アマゾン」と呼ばれる登場人物は、『夏の夜の夢』でテセウスに屈伏し彼と結婚するアマゾン族の女王ヒッポリタを別にすれば、『ヘンリー六世第一部』のジョウン・ピューセル(ジャンヌ・ダルク)と『ヘンリー六世第三部』の王妃マーガレットの二人であるが、¹⁴⁾前者は剣の試合でフランス皇太子を打ち負かし、フランスの救世主として軍隊の指揮を任せられ、連続して勝利を収める乙女であり、後者は夫ヘンリー王の弱腰に憤慨して自ら兵を起こして勝利し、反乱の首謀者ヨーク公を自らの手で刺殺する。彼女らは「男らしさ」の領分を明らかに侵犯している。それに対してヴォラムニアは、武勇中心的な価値観を他の男たち以上に備え、その点ではアマゾン的であるが、自ら武器を手にはせず、息子にその価値観を吹き込むことに専念し、その点ではむしろ父権制の強化に奉仕している。そのために、彼女は、テキスト上で記号“Amazon(ian)”と直接結び付けられることを辛うじて免れているのである。

(4)

再びコリオレイナスの“Amazonian chin”に戻ろう。この“Amazonian”は上に見てきた通り、彼の母ヴォラムニアにこそふさわしい形容詞であった。しかし、彼女が直接的に武器を手にはすることがないという事実、また息子を父権制のチャンピオンとも言うべき勇士に育てた母であるという事実は、“Amazonian”というという記号が公的に彼女と直接結び付けられるのを禁じてしまうのである。しかし、ヴォラムニアがアマゾン的な特徴を強く持っていればいるほど、記号“Amazonian”は彼女と結び付いてテキスト上に現れようとする強いエネルギーを帯びる。たとえそれが禁じられたとしても、この記号はテキストの別の場所にそのエネルギーの放出場所を求めらるであろう。そしてその場所とは、ヴォラムニアとは一見無縁そうであり、それゆえに彼女と“Amazonian”の直接的な結び付きを禁じる「検閲」の目をかいくぐることを可能にしながら、実はある深いところで彼女と繋がっている、そのような場所であろう。記号“Amazonian”はヴォラムニアによってそのエネルギーを吹き込まれているのであり、彼女と結び付けられることでしかそのエネルギーを解放できないはずだからである。

さて、では“his Amazonian chin”は、例えば“his Amazonian mother”という表現を作るはずだった“Amazonian”が「検閲」の目をかいくぐるために「移動」してできた表現だったことになる。¹⁵⁾そこに充当されたエネルギーを解放してやるには、そこにヴォラムニアとの結び付きを読み取る必要がある。従来、この箇所にヴォラムニアとの結び付きを読み取ろうとする企ては皆無であった。最初にも見た通り、ここでの“Amazonian”は“beardless”と語釈を

付けられただけで片づけられてきた。たとえ“Amazon”に関して簡単な説明がなされているとしても、それはアマゾン族が女性であることを指摘して、“his Amazonian chin”の“Amazonian”が「髭がない」の意になることを補足的に説明しているだけであって、「アマゾン族」が極めて「女らしくない」(unfeminine)女性たちであり、男女の性差(ジェンダー)を侵犯する存在であるという、彼女たちのもっとも本質的な面は顧慮されなかった。Amazonian = beardless という解釈によって背後に追いやられ隠蔽されてきた「アマゾン族」本来の神話的イメージを顕在化し、“Amazonian”とヴォラムニアとの結び付きを回復したとき、“his Amazonian chin”は新たにどのような読みを可能にするであろうか。

(5)

コミニアスが“his Amazonian chin”という言葉のを口にするのは、コリオレイナスを次期執政官に推挙するための公的演説においてであった。そのなかでこの箇所は、コリオレイナスが十六歳の初陣のときからすでに他に抜きん出た武勇を示したことを讃えるのが第一のテーマとなっているのは言うまでもないことである。しかしその一方で、この箇所は、その初陣がローマ社会の一般的な慣習に照らして、いささか早すぎたものであったことを、その“his Amazonian chin”という表現によって象徴的に語ってもいる。¹⁶⁾この「早すぎた初陣」のテーマはこのあとも二度繰り返される。

その日の手柄で、

舞台でならまだ女役を演じる少年の身でありながら、

戦場で随一の男であることを証明しました、……

……まだ見習いの年齢のときに

このように男の世界に仲間入りをし、荒海のような勇将となりました。

In that day's feats,

When he might act the woman in the scene,

He prove'd best man i' th' field, ...

...His pupil age

Man-enter'd thus, he waxed like a sea.

(II.ii. 95-99)

コリオレイナスをこのように早すぎる時期に戦場へと駆り立てたのが、母ヴォラムニアであったことは彼女自身が認めていた。彼女は息子がまだ「ひ弱な体のときに」(When yet he was but tender-bodied) (I.iii. 5-6), 「残酷な戦争へと送り出した」(To a cruel war I sent him) (14)と言っていた。そして次の市民1の言葉は、コリオレイナスを戦場での名譽へと駆り立てて

いるのが彼の母親であることを、ローマの一般民衆までもがよく知っていたことを示している。

お人好し連中は、あれは国のためだったと言って納得するかもしれないが、彼は母親を喜ばせるためにやったんだ。

Though soft-conscienced men can be content to say it was for his country, he did it to please his mother.

(I.i. 36-38)

コリオレイナスの戦功の背後には、初陣のときから常に彼を戦場へと駆り立ててきた母ヴォラムニアがいる、そして、寡婦として父親役も兼ねなければならなかったであろう事情も手伝って、彼女が男性的な、武勇中心的な価値観を持った「アマゾン的な」女性である、ということは劇中のローマ社会の共通認識であったと言ってよい。“his Amazonian chin”をこうした文脈のなかに置いてみると、それはただ単に“his beardless chin”という、彼の初陣のころの肉体的未熟さを象徴する表現であるばかりでなく、そのように未熟な彼を戦場へと追い立てる“his Amazonian mother”を背後に秘めた表現であることが分かるであろう。①「アマゾン的な (Amazonian) 母を持つコリオレイナスはその母に駆り立てられて」、②「顎に髭も生えていない (beardless) 未熟な体で」初陣を経験したのだ。もちろん、コミニウスがこれをそのままの形で演説で語ることなど許されない。何といたってもヴォラムニアはこれから次期執政官に推薦されようとしている英雄の母なのである。検閲をかわすために、①と②は合体し、表面上は②の意味だけを持つ“with his Amazonian chin”という表現を作り出す。このように考えたときに初めて、②の意味を表すのに、一見奇妙な“Amazonian”という言葉が使われている理由が理解できるであろう。劇中のコリオレイナスはローマの父権制を支える男性中心的な価値観の体現者であるが、その背後には「アマゾン的な」母がいる。これは一見奇妙な取り合わせである。しかし考えてみれば、彼はそのような男勝りの母を持ったがゆえにそのように「男らしい」男になったのである。女性である母が「女らしさ」の枠を越えて「男らしさ」の領分を侵犯して来るとき、息子が自らの「男性性」を維持するためには、彼女を「女らしさ」の枠のなかに押し戻すか、さもなければ自らが母以上に「男らしさ」を追求するしかないであろう。親にたいする「孝心」(piety)を重んじるローマ社会にあっては、前者の選択はあり得ない。コリオレイナスは後者の選択を余儀なくされたのである。

父権制のチャンピオンであるコリオレイナスの背後には男勝りの母ヴォラムニアがいる。彼は父権制に脅威を突きつけるアマゾン的な母を持ったがゆえに、ますますその父権制を強固なものにすべく邁進せざるを得ない。見方を変えれば、彼の超人的なまでの武勇は、アマゾン的な母に依存しているとも言える。父権制社会を支える武勇中心的な価値観のもっとも純粋な体現者であるコリオレイナス、その彼を形容するのに“Amazonian”という言葉は一見場違いに思われる。しかし実は、それは上のような母と息子の関係を、さらには父権制と母権制との関

係を、暗示しているのである。“his Amazonian chin”という表現は、“Amazonian”が本来第一義として持っている「アマゾンのな」の意を背後に隠すことによって、ローマ社会の父権制の本質を象徴的に物語っていると言えよう。

(注)

- 1) 参照した『コリオレイナス』の注釈書は① R.B. Parker 編 The Oxford Shakespeare (Oxford Univ. Press, 1994), ② Tony Parr 編 The Macmillan Shakespeare (Macmillan Education, 1985), ③ Philip Brockbank 編 The Arden Shakespeare (Methuen, 1976), ④ G.R. Hibbard 編 The New Penguin Shakespeare (Penguin Books, 1967), ⑤ John Dover Wilson 編 The New Shakespeare (Cambridge Univ. Press, 1960)の五種類である。『コリオレイナス』からの引用ならびに行数表示はすべて③のアーデン版による。訳文の作成にあたっては木下順二訳『シェイクスピアⅧ』(講談社, 1989), 小田島雄志訳『シェイクスピア全集Ⅲ』(白水社, 1975), および築摩書房版『シェイクスピア全集 8』(1967)の倉橋健訳を参照した。なお、シェイクスピアの『コリオレイナス』以外の作品からの引用、行数表示も各作品のアーデン版による。
- 2) シェイクスピアにおいては、髭は“man”と“woman”の違いを示す弁別の特徴として用いられることが圧倒的に多いが、次の引用のように“man”と“boy”の違いを示す弁別の特徴として用いられている例もいくらかある。“He that hath a beard is more than a youth, and he that hath no beard is less than a man” (*Much Ado about Nothing*, II.i.32-33).
- 3) 論者が読んだ範囲でこの“Amazonian”を特に問題にしているのは、Michael Long, *The Unnatural Scene: A Study in Shakespearean Tragedy* (Methuen, 1976) だけである。彼はここでのコミニアスの演説が「セクシャリティ」に満ちており、しかもそれがひどく歪んだやり方で提示されているとして、この箇所に着目している。“In that context the Amazon is particularly odd and disturbing, for a boy is becoming a man by being like women who in their turn are unfeminine” (p. 65). ここで彼が“Amazon”の「非女性的な」側面に目を向けているのは重要なことである。しかし、彼は“Amazon”に関して、それ以上に考察を進めることはしていない。
- 4) J.J. バハーフウェン『母権制(上)』(吉原達也・平田公夫・春山清純訳)(白水社, 1992), pp. 174-182を参照。
- 5) マイケル・グラント&ジョン・ヘイゼル『ギリシア・ローマ神話事典』(西田実主幹, 入江和生他訳)(大修館書店, 1988)。
- 6) ペンギン版の編者 G.R. Hibbard はヴォラムニアのことを“[Virgilia's] Amazonian mother-in-law” (Introduction, p. 29)と呼んでいる。また、Harold C. Goddard も, “she had been little other than an Amazon” (*The Meaning of Shakespeare* [The Univ. of Chicago Press, 1951], p. 598)と述べて彼女を“Amazon”と結び付けている。
- 7) 台詞中でのコリオレイナスの呼称は、多い順に以下のようにになっている。なお、()内の数字は使用回数を示す。Martius (60), Coriolanus (28), Caius Martius (11), Martius Caius Coriolanus (3), Caius (2), Martius Caius (1)。
- 8) アーデン版の「登場人物一覧」に付された注釈による。
- 9) 他に、コリオレイナスが“The god of soldiers” (V.iii.70) という形で軍神マルスに呼びかけている例もある。
- 10) Geoffrey Bullough, *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol. V (Routledge, 1964), p. 537.

- 11) この場面に関して, Alexander Leggatt は次のように述べている。“The sight of son and mother reconciled is ‘unnatural’ because Volumnia, who gave him life, has just given him death.” (*Shakespeare’s Political Drama : The History Plays and the Roman Plays* [Routledge, 1988], p. 209.)
- 12) Vivian Thomas, *Shakespeare’s Roman Worlds* (Routledge, 1989), p. 187.
- 13) Brian Vickers, *Returning to Shakespeare* (Routledge, 1989), p. 144.
- 14) ジョウン・ピューセルは, “thou art an Amazon,/And fightest with the sword of Deborah” (I. ii.105-6) と言われている。また王妃マーガレットに関しては, “How ill-beseeming is it in thy sex/
To triumph like an Amazonian trull/Upon their woes” (I.iv.113-15) と “Belike she minds to play the Amazon” (IV.i.105) の二箇所アマゾンに結び付けられている。
- 15) 「検閲」, 「移動」という概念はフロイトの著作, 特に『フロイト著作集 1 精神分析入門 (正統)』(縣田克躬・高橋義孝訳) (人文書院, 1971) 中の「第二部 夢」を参照にしている。
- 16) 因みに, 十六歳という年齢は初陣を経験するのに早すぎることはないように思われるかもしれないが, 古代ローマの習わしでは, 若者が軍隊に入る年齢は十七歳であり, その前の十五歳から二年間は見習い期間とされていた。コリオレイナスの初陣の年齢を十六歳としたのはシェイクスピアの独創であるが, 古代ローマの慣習を踏まえて書いているように思われる。cf. 長谷川博隆『古代ローマの若者たち』(三省堂, 1987), pp. 64-69.